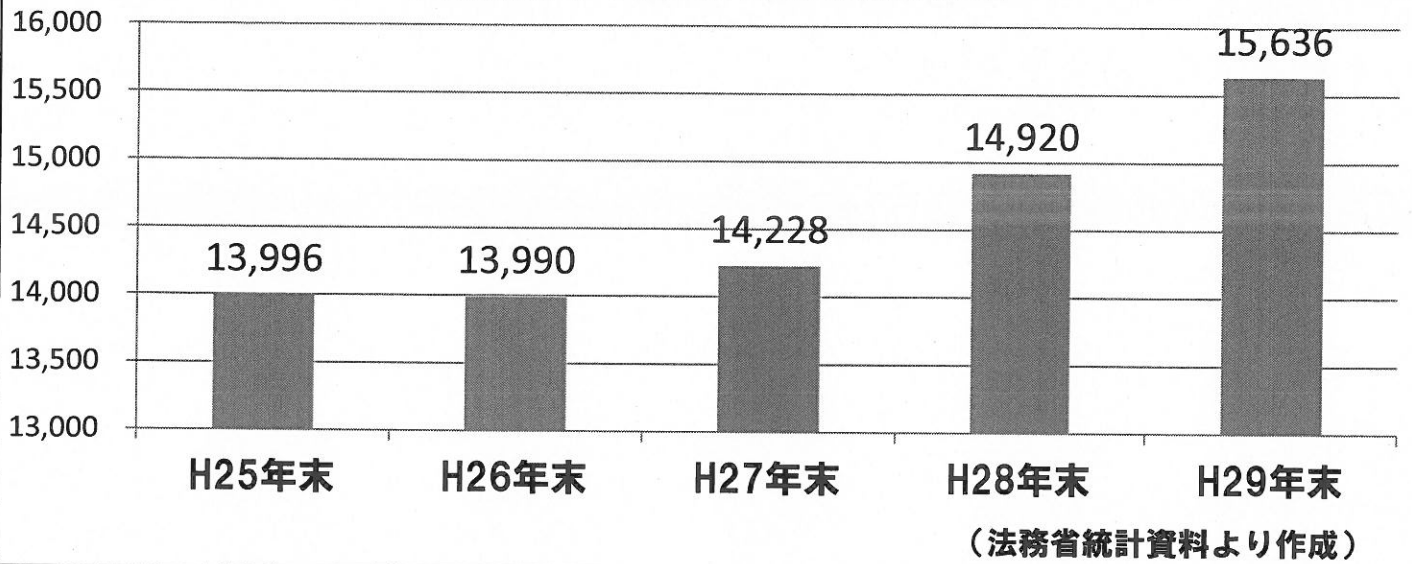
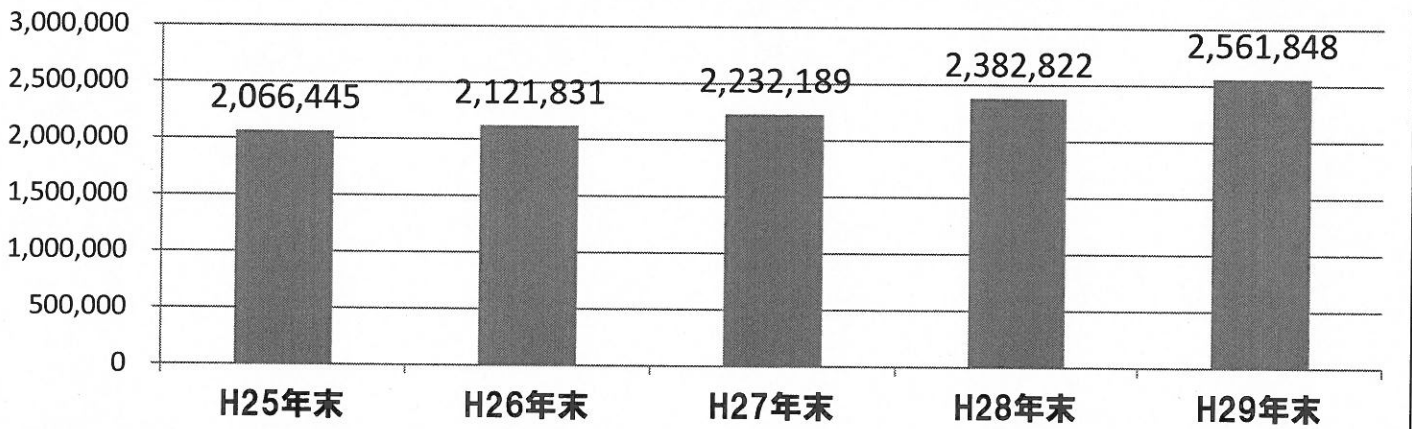


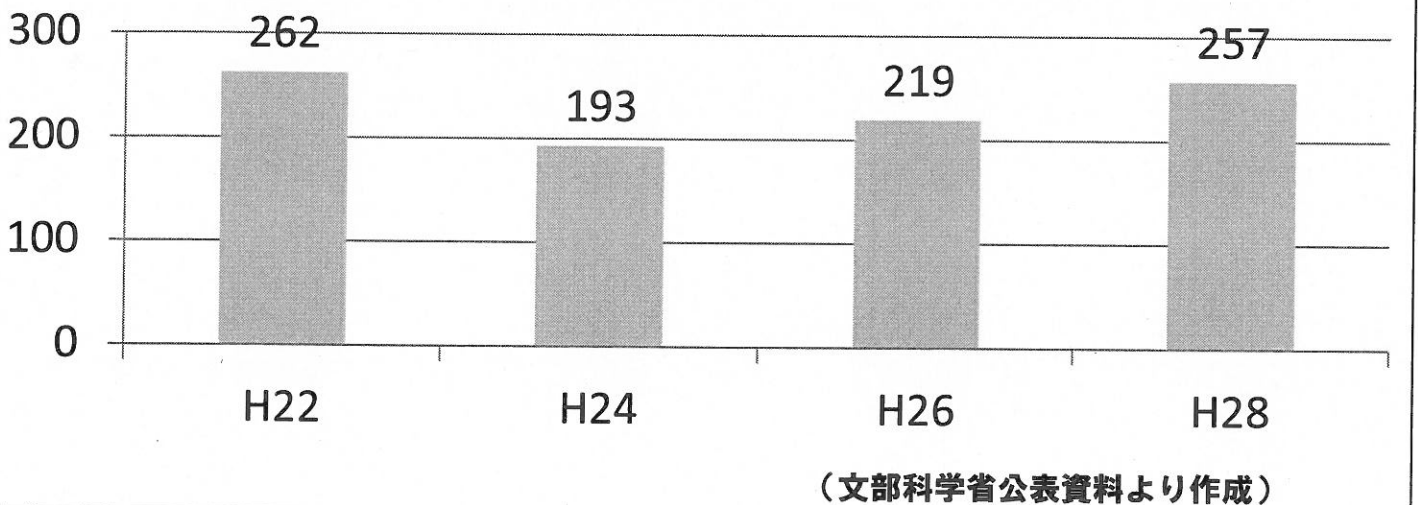
山梨県内の在留外国人数の推移



【参考】 在留外国人数の推移（全国）

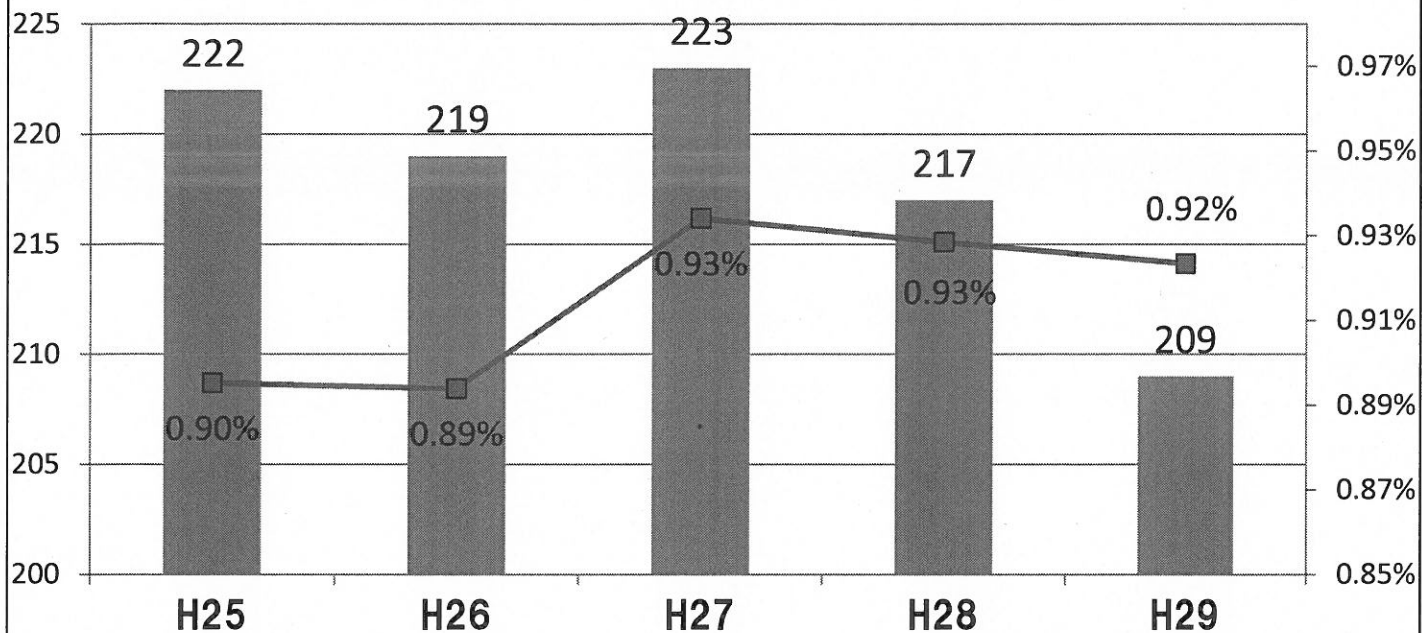


山梨県内の日本語指導が必要な外国人児童生徒数



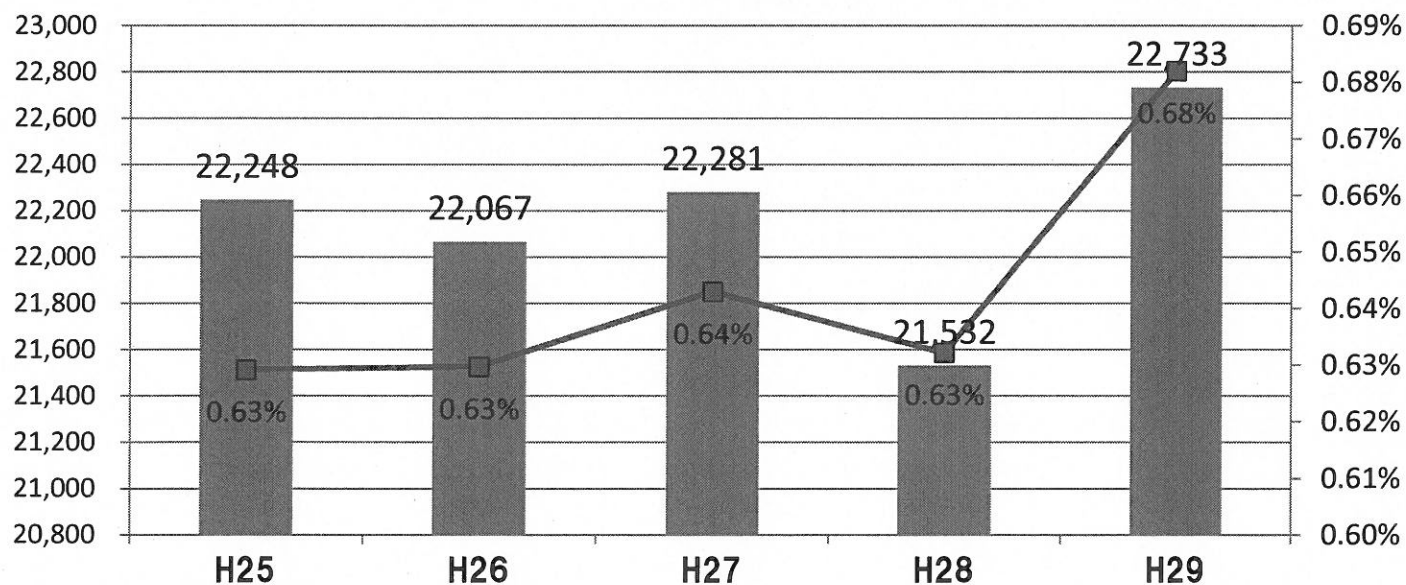
# 外国人児童生徒数の状況

## 山梨県内の中学校在籍外国生徒数の推移

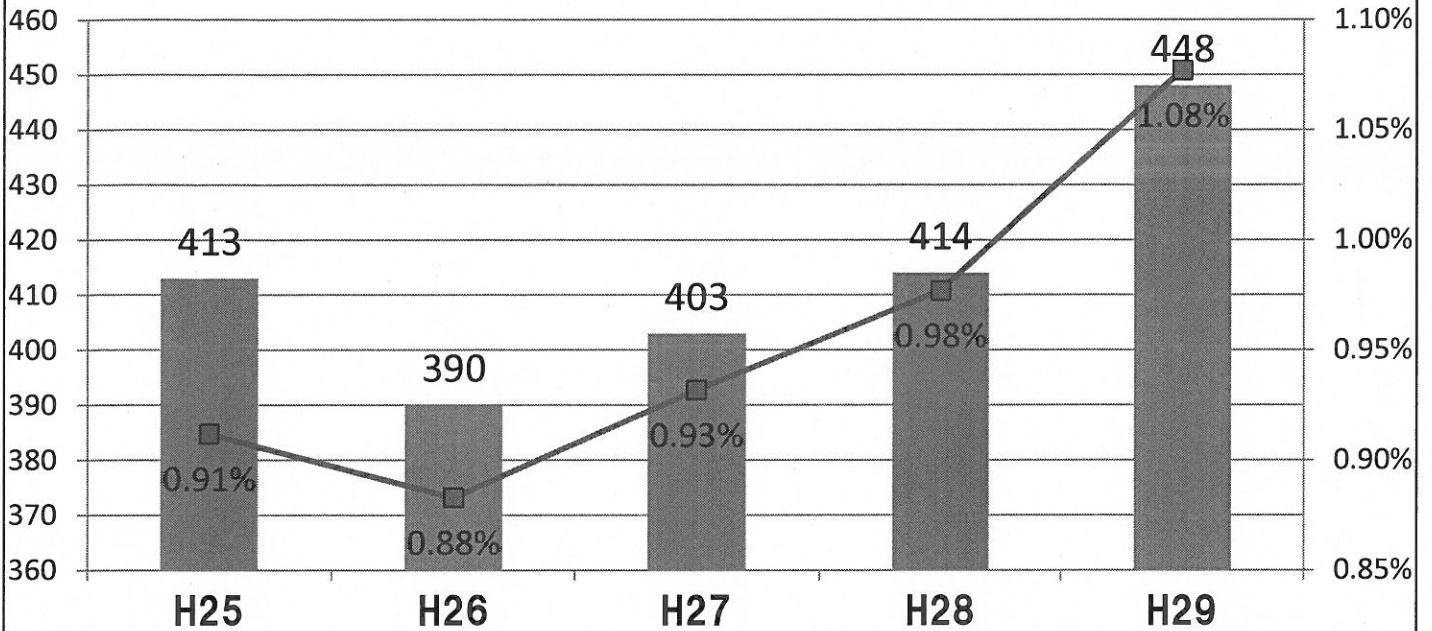


(文部科学省学校基本調査より作成)

## 【参考】 中学校在籍外国生徒数の推移（全国）

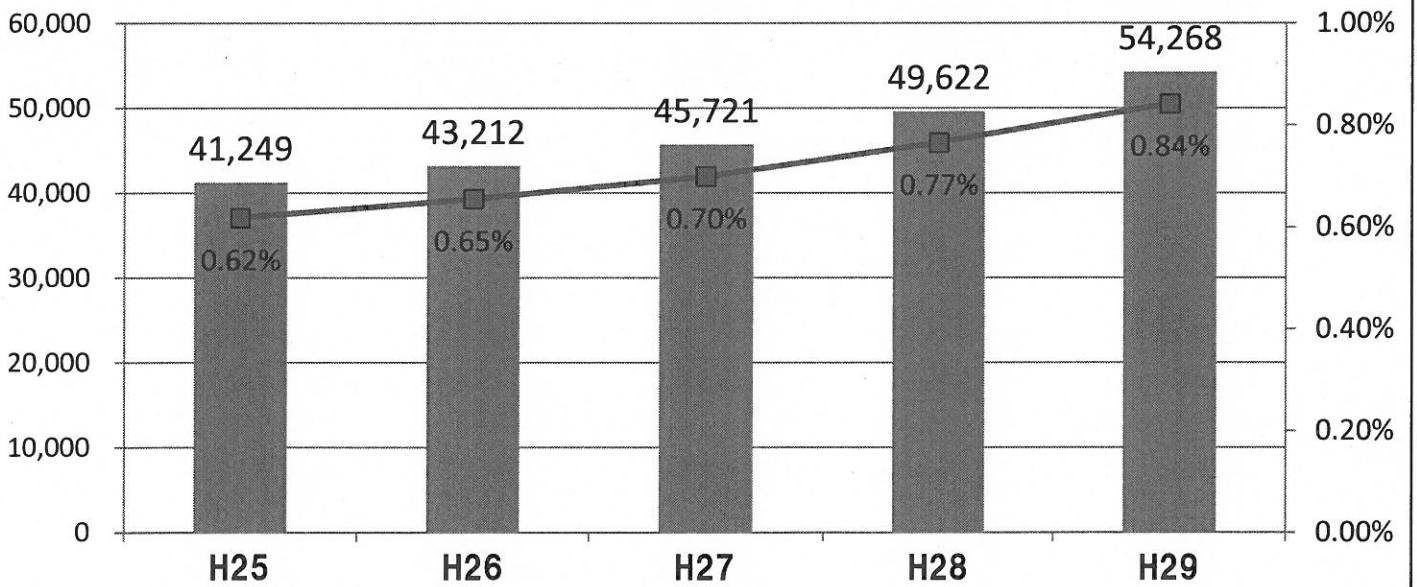


### 山梨県内の小学校在籍外国児童数の推移

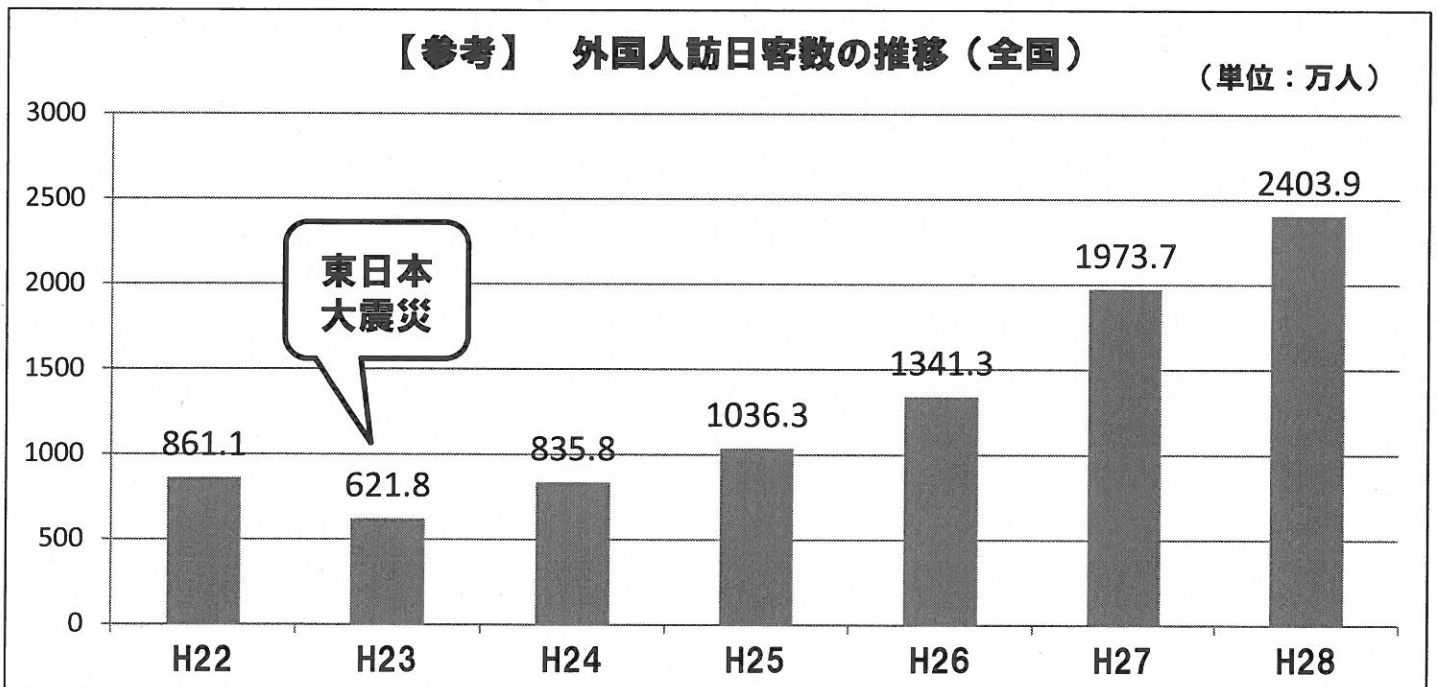
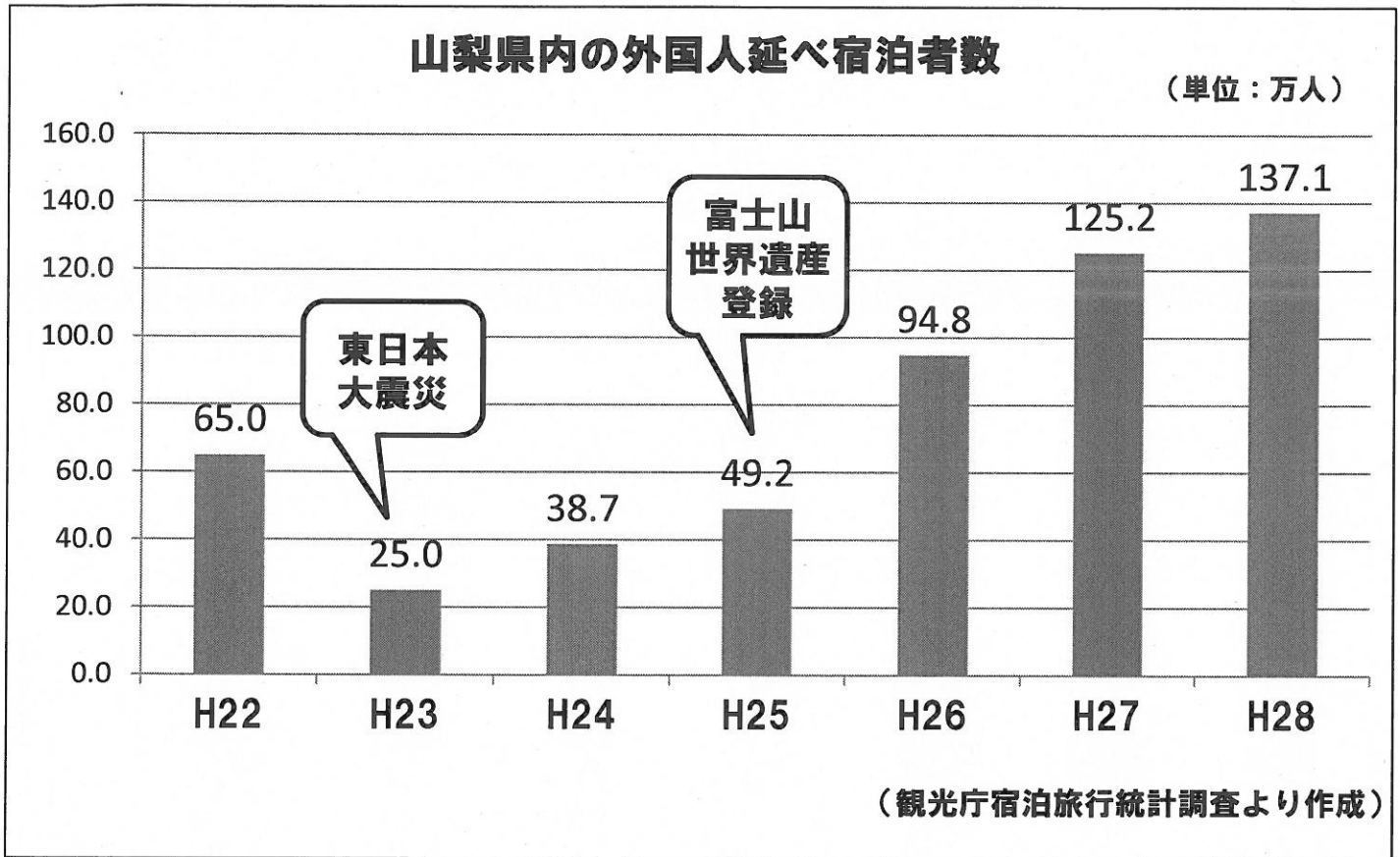


(文部科学省学校基本調査より作成)

### 【参考】 小学校在籍外国児童数の推移（全国）



# 外国人観光客数の状況

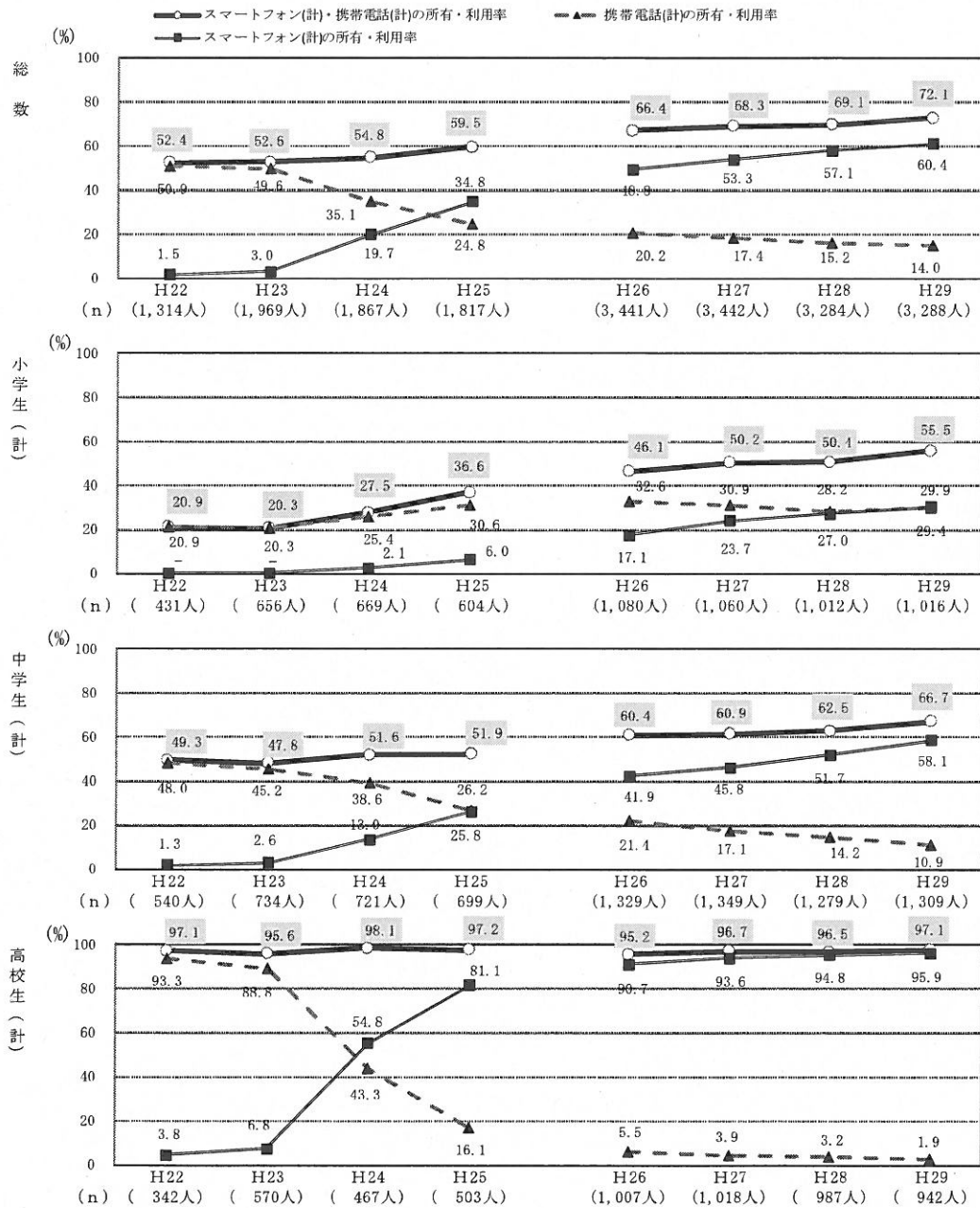


# 資料 4

## (参考資料1) 青少年のスマートフォン・携帯電話の所有・利用状況

平成 26 年度より調査方法等を変更したため、平成 25 年度以前の調査結果と直接比較できないが、青少年のスマートフォン・携帯電話の所有・利用状況を参考資料として示す。

図表Ⅱ-1-1-80 スマートフォン・携帯電話の所有・利用状況



平成29年 内閣府  
「青少年のインターネット  
利用環境実態調査より抜粋

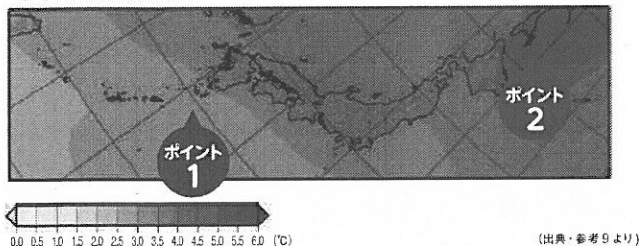
環境省「STOP2017」  
より抜粋

## 将来の日本の気候変動（温暖化）

### 日本は将来暑くなる

21世紀末の年平均気温は全国的に高くなると予測されています。現在のように温室効果ガスを排出し続けた場合は、21世紀末には、地域によって現在よりも3.3～4.9℃高くなると予測されています。また、低緯度より（ポイント①）も高緯度の地域のほうが（ポイント②）、気温上昇が大きくなります。（出典・参考9より）

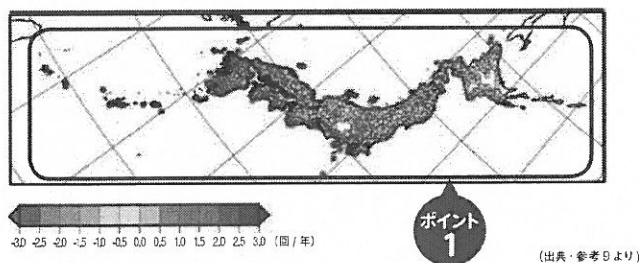
▶ 現在のように温室効果ガスを排出し続けた場合の年平均気温の変化



### 強い雨の回数が増える

21世紀末において、滝のように降る雨（1時間降水量50mm以上）の発生回数は全国的に増加すると予測されています（ポイント①）。現在のように温室効果ガスを排出し続けた場合は、全国平均で2倍以上の回数になると予測されています。（出典・参考9より）

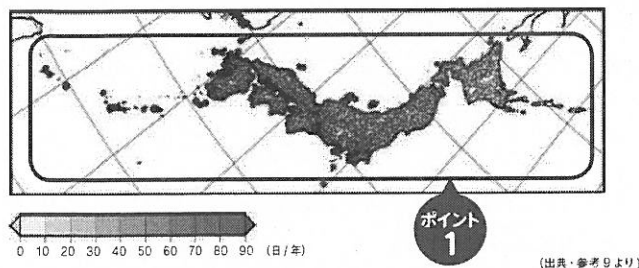
▶ 現在のように温室効果ガスを排出し続けた場合の強い雨の発生回数の変化



### 暑い日が増える

21世紀末の真夏日（日最高気温が30℃以上）の年間日数は全国的に増加すると予測されています（ポイント①）。現在のように温室効果ガスを排出し続けた場合には、全国平均で現在よりも約49日増加すると予測されています。（出典・参考9より）

▶ 現在のように温室効果ガスを排出し続けた場合の真夏日日数の増加数

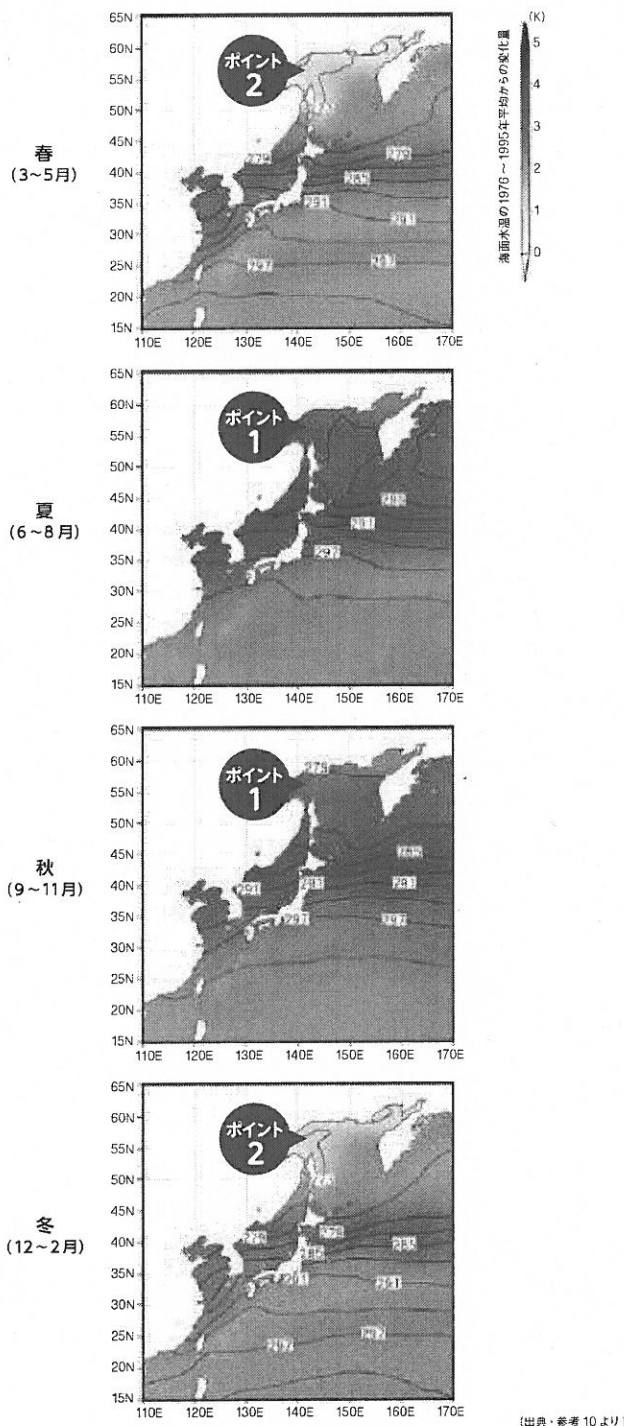


### ほとんどの海域で海水が昇温する

日本近海の海面水温は、現在のように温室効果ガスを排出し続けた場合\*、将来（2076～2095年平均）ほとんどの海域で、現在よりも上昇すると予測されています。オホーツク海の海面水温上昇は、夏・秋は全域でほぼ一様（ポイント①）であるのに対し、春・冬はユーラシア大陸沿岸付近で相対的に小さくなっています（ポイント②）。海域による上昇量の違いには、オホーツク海を覆う海水の量が関係している可能性があります。つまり、海水の少ない夏・秋は気温の上昇等を背景として他の海域と同じように昇温しますが、春・冬においては海水の多い海域で昇温が抑えられると推察されます。

\*ここでは RCP8.5 ではなく SRES A2 シナリオを使用  
（出典・参考10より）

▶ 海面水温の将来変化



環境省「STOP2017」  
より抜粋

影響 予測 適応

# 将来の温暖化影響 (食料: 農林水産業)

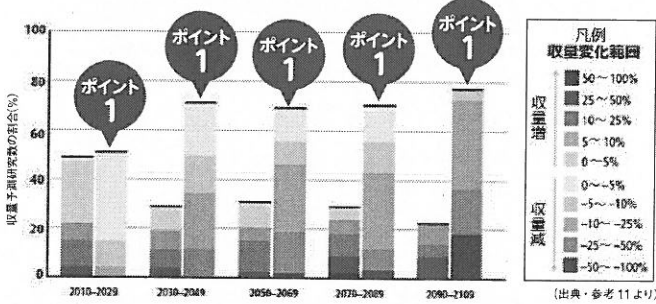
## 穀物収量の低下が予測されている

将来人口が増加すると食料需要は高まります。

一方で、20世紀後半より地域の平均気温が2℃以上高くなると、適応策をとらない場合、熱帯、温帯の作物(小麦、米、トウモロコシ)の収量は本来よりも減少し、4℃以上高くなると、食料安全保障にとって大きなリスクになると予測されています。

下図にまとめられている予測は、熱帯及び温帯地域を対象に、異なる排出シナリオによる予測も適応策がとられている場合もとられていない場合も含まれます。収量変化は20世紀後半と比較したもので、時間経過とともに、収量減の証拠が増加していくのがわかります(ポイント①)。

### ▶ 気候変動による作物収量変化予測の研究数の割合



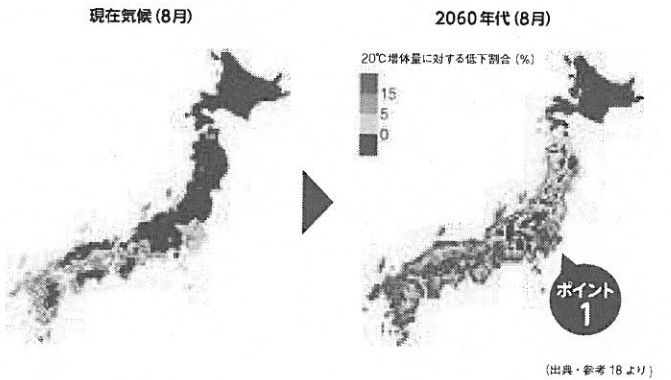
## ウシにも影響が

気温上昇により、ウシは夏季の日増体量(日体重増加量)が減少すると予測されています。そのため、地球温暖化に伴い、夏に体重増加量が低下する地域が拡大します(ポイント①)。

これは、肥育豚やブロイラーでも同様の傾向を示しています。

(出典・参考 18 より)

### ▶ 夏のウシの日増体量低下予測



## 水稲は品質の更なる低下が、果樹では栽培適域の変化が

日本の、現在のように温室効果ガスを排出し続けた場合の21世紀末におけるコメの収量予測\*では、全国的に現在と同じか増加する地域が大半を占めるとの予測があります(ポイント①)。一方で高温により、品質低下のリスクが高くなる(ポイント②)との予測もなされています。

(出典・参考 14,15 より)

将来、東北中部の平野部まで、リンゴが栽培しにくい気候となる可能性が示唆されています。また、ウンシュウミカンの栽培適地の北上が予測されています。

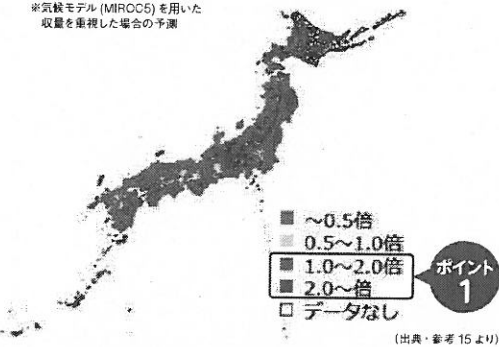
現在よりも年平均気温が3℃上昇したと仮定した2060年代には、東北北部の平野部など現在のリンゴ主力産地では、リンゴの栽培が難しくなると予測されています(ポイント①)。

現在のように温室効果ガスを排出し続けた場合の研究では、ウンシュウミカンの適地よりも高温となる地域が徐々に北上し、21世紀半ばには九州の一部で、また21世紀末には関東以西の太平洋側を中心としたほとんどのウンシュウミカン生産県で、適地が半減すると予測されています(ポイント②)。

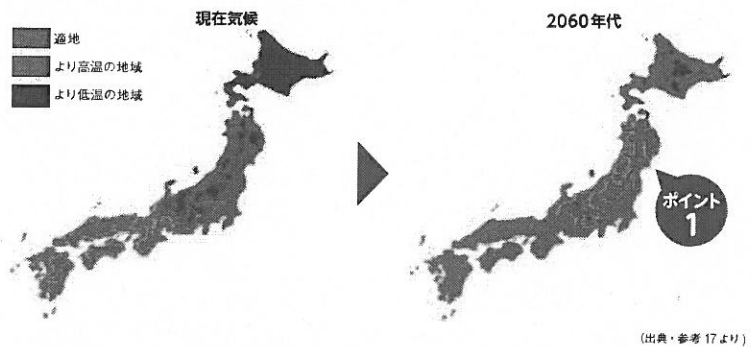
(出典・参考 16,17 より)

### ▶ 21世紀末の現在からのコメ収量変化\*

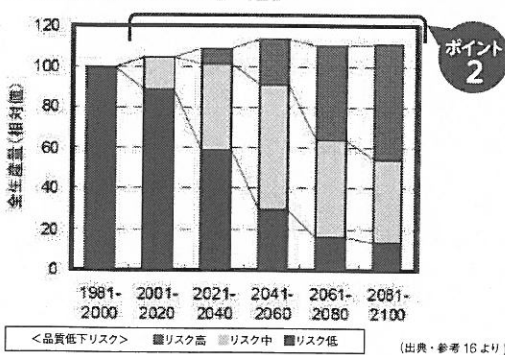
\*気候モデル(MIROCC5)を用いた収量を重視した場合の予測



### ▶ リンゴの栽培適地の変化予測



### ▶ 全生産量の20年ごとの推移



### ▶ ウンシュウミカンの栽培適地の変化予測\*

